

I 研究について

1 情報モラル教育に関しての学校課題

今年度8月に本校では1人1台端末（タブレット）が実現し、実際に活用する状況となった。本校の生徒のスマートフォンの所持率は年々上昇しており、SNS利用による生徒指導上でのトラブルは毎年数件ずつ起きている。その都度トラブルを解決してきたが、日頃の指導としては、メディアと接触する時間を抑制したり、トラブルの事例を紹介したりして注意喚起することが主であった。今後は生徒がメディアを活用することを前提として、我々教員の情報機器を扱うスキルはもちろん、情報モラルに関する指導の専門性を高めることや、リスク教育の重要性を知ることは必要不可欠である。単発的な指導にとどまらず、計画的かつ組織的・継続的に指導を行うことで、生徒自身の主体性や判断力が身につくものとする。

2 令和3年度の重点事項と計画

今年度は、生徒・保護者・家庭の実態把握と教員の情報モラルに関する専門性の向上を目指し、以下を重点事項として年間の計画を立てた。

(1) 重点事項

- ① アンケートから現状分析を行い、日常の指導に活かす。
- ② 研究授業を通して、教員の専門性の向上を高める。
- ③ ふくしま教育アドバイザーの御指導をいただき、教員のモラル教育とリスク教育のスキルを高める。

(2) 今年度の計画

時期	実施内容
5月24日	表郷小・中学校打合せ
6月下旬	全校道徳（情報モラルに関する授業）の実践
7月上旬	生徒・保護者・教員のアンケート調査
10月4日	第1回校内研究授業（学活）
12月20日	第2回校内研究授業（道徳）
2月7日	校内研修会（今年度の実践のまとめ）

(3) 研究の概要

① 一歩踏み込んだ実態把握

本校では年1回のスマートフォンの使用に関するアンケートを行い、生徒のスマートフォンの使用状況やSNSの利用状況を確認してきた。また、年4回行っている生徒へのいじめに関するアンケートの中で、ネットトラブルやSNSに関するトラブルを把握し、随時対処してきた。しかし、スマートフォンやSNSの使用状況などの一歩踏み込んだ実態を知ることはなかった。そこで、情報セキュリティメーカーのデジタルアーツ株式会社が行っている実態調査を参考にアンケートを作成し、生徒・保護者・教員を対象として実施した。それらの分析結果をもとに情報モラル教育の実践を行うこととした。

② 手探りの情報モラル教育から方向性を明らかに

本校では毎年、全校道徳として、1学期に同じ教材の内容を全学年・全学級で実施している。昨年度からネットトラブル、SNSに関わるいじめを題材とした教材を扱い、生徒一人一人に望ましいネット利用やルール・マナーなどについて考える機会を設けてきた。しかし、事例を提示して、これはいけない、こうならないようにしないと、といったことを自覚させるに留まり、自分事として捉えさせるには十分とは言えなかった。SNSの利用については、年に数回トラブルが発生しており、その都度生徒指導を行ってきたが、手応えがなく、我々の指導が行き届いてきたのか、生徒の情報モラルは育まれているのか、指導においても手探りの状況であった。そこで、今年度実施したアンケートにより実態を把握した結果を基に、我々教員の専門性やスキルを高めることに重きを置くこととした。

Ⅱ 研究の実際について

1 アンケートから

(1) アンケートの概要

生徒と保護者に対するアンケートは、全国的な規模で行なわれた調査結果を例に独自に作成して実施した。それにより、全国との比較をすることができ、本校の実態や特徴をとらえやすくなると考えた。

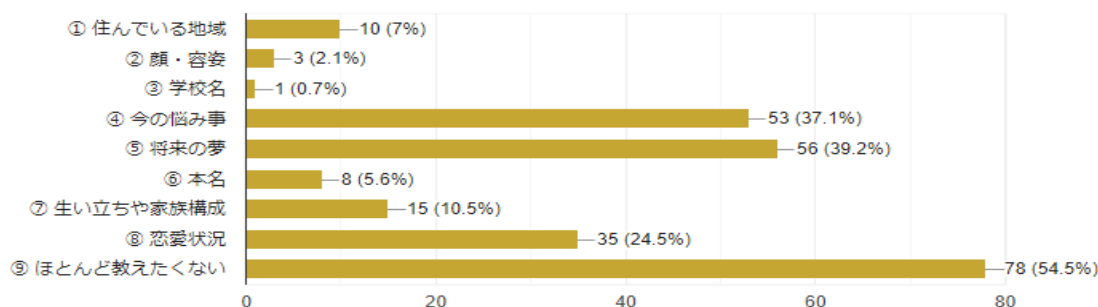
(2) 生徒アンケートから

・自分専用のスマートフォンの所持率	81.8% (96.1%)
・午後10時～午前0時のスマートフォンの使用	32.9% (51.5%)
・裏アカウントを持っている	25.0% (34.0%)
・ネット上だけの友達がいる	25.9% (35.0%)
※ () は参考にした全国的な調査の中学生の実態調査結果	

ネット上だけの友達がいる生徒は37人で、うち「既に会っている」が2人、「できれば会ってみたい」が7人、「写真なら送ってもよい」が1人、「相手の年齢や性別によって会ってもよい」が1人であった。デジタルアーツの実態調査結果と比較し、本校生徒の値は下まわっているが、裏アカウントの所持やネット友達などについて新たな事実をつかむことができた。

◇ネット友達にどこまでの情報を教えられるか？

143件の回答

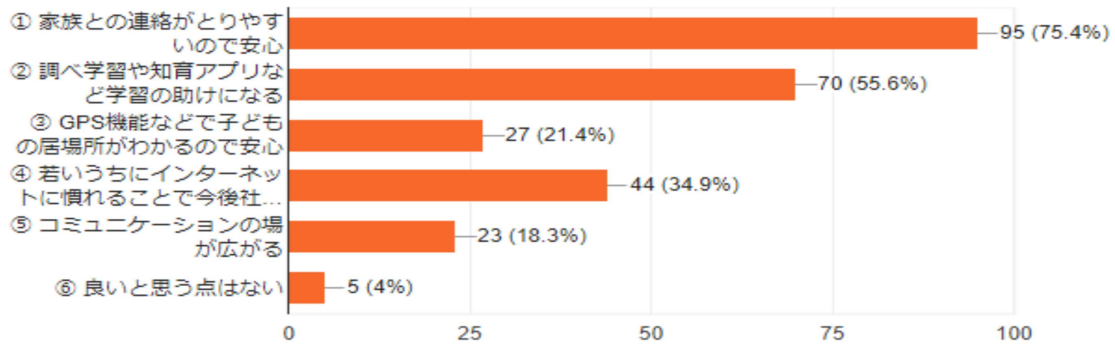


ほとんど教えたくないが54.5%であるが、住んでいる地域、顔・容姿、本名、生い立ちや家族構成などの個人情報に関わることを教えても構わないと考える生徒がいることが分かった。

(3) 保護者アンケートから

◇子どものインターネット利用について良いと思う点は何か？

126件の回答



調べ学習や知育アプリなど学習の手助けになるが55.6%（17.2%）、若いうちにインターネットに慣れることで今後社会に出てから役立つが34.9%（27.2%）であった。インターネットを学習で活用することについて、多くの保護者が肯定的な考えと活用をすることで将来に活かせると期待を抱いていることが分かった。

※（ ）は参考にした全国的な調査の中学生の実態調査結果

(4) 教員アンケートから多くの教員が不安に感じていること

- ・自身のICTに関する知識・技能不足
- ・インターネット上のルールの指導やネットトラブルへの対応
- ・SNSのトラブル回避やソーシャルスキルの指導

(5) アンケートから見えた課題

我々の専門性やスキルを高めることで、授業や日頃の指導を充実させ、インターネットやSNSの望ましい利用について生徒自身に考えさせ、情報端末を効果的に活用できる力を育む必要性を感じた。

2 校内授業研究会から

(1) 第1回校内授業研究会（学級活動 10月4日）

第3学年 学級活動 LINE×静岡大学『楽しいコミュニケーション』を考えよう！基本編

① 生徒の実態から

80%以上が自由に使えるスマートフォンやタブレットを持っており、ほぼ全ての生徒がSNSを使用している。

② 授業構想

カード教材を活用して他者と自分の考えを比較したり、ペア学習を通して自分事として問題に向き合い考えたりすることで、当事者としての自覚を促す。

③ 授業の実際

〈本時のねらい〉

コミュニケーションをとる際に重要となる、自分と相手との考え方や感じ方の「違い」に気付き、上手なコミュニケーションのポイントについて考えることができる。

学習活動・内容

- 1 友達に言われて「嫌だな」と感じる言葉を考える。
- 2 課題把握

「上手なコミュニケーション」をとるためのポイントは何か。

- 3 友達にされたら「嫌だな」と感じることを考える。
- 4 どんなトラブルが起こる可能性があるか考える。
- 5 トラブル回避の対応と上手なコミュニケーションのポイントについて考える。



④ 事後研究協議会から

- 生徒の意見交流・深まりが見られた。トラブル発生の原因について気付きを促し、自分事として考えさせることができていた。
- ロイロノートを使って意見を交流し、全体で共有していたが、本音が出ていたのが気になる。入力に時間もかかっていたので、効果的な活用方法を模索する必要がある。

⑤ 指導助言

【学活の視点から】 福島県教育庁義務教育課 藤井宏 指導主事

- ロイロノートの有効的な活用が図られていた。
- まとめの時間をもう少し増やすことで、考えがさらに深まったと考えられる。

【情報モラル教育の視点から】 静岡大学教育学部学校教育講座准教授 塩田真吾 先生

- アンケートを効果的に提示することで自分と他人との違いに気付かせていた。
- ※自分がトラブルを起こすかもしれないという自覚が情報モラル教育の第一歩である。

(2) 第2回校内授業研究会(道徳 12月20日)

第1学年 道徳「ルールを守る工夫」 【C-10】 遵法精神、公德心

① 生徒の実態から

タブレットでの学習に意欲的である一方で、授業中にタブレットの思考ツールを使って意見交流をする際に、数人の生徒が関係のないカードを送り合う事例が発生した。

② 授業構想

「ルールを破りそうになるとき」を具体的にイメージさせ、当事者だからこそ実感している必要なルールや課題を議論させることを通して、よりよい使い手としての行動実践を考えさせる。

③ 授業の実際

〈本時のねらい〉

タブレット端末を使う学習者として、そのルールや問題点を話し合うことを通して、よりよい社会をつくるためにどのような行動を選択するべきか、道徳的な心情を育てる。

学習活動・内容	
1	デジタル庁のアンケート結果を確認する。
2	新聞社アンケート結果を確認する。
3	課題把握
	ルールはどうすれば守られるのか。
4	タブレットのルールについて考える。
5	ルールを「破りそうになるとき」を考える。
6	5の場面での具体的な行動を考える。
7	学習を振り返り自分の考えをまとめる。



④ 事後研究協議会から

- 実態に即したタイムリーな題材を扱うことで、生徒が真剣に授業に取り組んでいた。
- 教材の吟味や精選が難しい。本音を出させる工夫が必要である。

⑤ 指導助言

【道徳の視点から】福島県教育庁義務教育課 肥沼志帆 指導主事

- 班での話し合い活動などで活発な意見交換がなされていた。
- 多様な価値観にふれ自分を見つめさせ、道徳教育の要としての道徳の授業づくりを行ってほしい。

【情報モラル教育の視点から】静岡大学教育学部学校教育講座准教授 塩田真吾 先生

- 生徒が自分事として考えられるような資料提示がなされたい。
- スローガンのような目標でなく、具体的な行動実践を考えさせる必要がある。

Ⅲ 成果と課題について

1 成果と課題

- モラル教育とリスク教育のバランスが大切であることや、リスクのグラデーションなど、これまでになかった視点で情報モラル教育を教員全員で捉え直すことができた。それにより、今後の本校の情報モラル教育の方向性を見いだすことができた。
- 情報モラル教育を道徳や学活の中でどのように行っていくか、自分事として生徒に考えさせるにはどのような工夫が必要なのか、教員自身が学ぶことができた。安易な結論を与えず、どのように対応すればよいのか様々な状況で考え続けさせる（トレーニング）ことが大切であることを理解することができた。これらは、日頃の指導（学習指導・生徒指導・部活動指導）の根幹をなすものであり、我々の指導の在り方を見直す機会となった。
- アドバイザーの塩田先生の御指導から、危機管理やリスク回避など、校務に活かせる内容を習得することができた。
- 日々変化している情報化社会に対応するためには、ICTに関する教員の知識・技能を高める必要がある。情報モラル教育とあわせて、教員一人一人の研修意欲をさらに高めていかなければならない。
- 生徒や保護者の実態をふまえた上で、3年間の見通しをもって、計画的かつ継続的に指導を行っていく必要がある。また、日常的な指導や教科の中での指導をどのように行っていくか模索する必要がある。

2 次年度以降の取組について

- ・ 生徒や保護者の実態を把握し、今年度との比較をすることで、変容を確実に捉え指導に活かしていく。
- ・ モラル教育とリスク教育を組み合わせた教材開発を行っていく。
- ・ タブレットの家庭への持ち帰りが日常化する中で、家庭と連携した取組を実践していく。
- ・ 表郷小学校との連携をさらに強化し、系統的な指導を実践していく。